

店を出て駅まで歩く間私は彼の歩く速度が昔と同じように私に合わせて少し遅くなっていることに気づいた。そういう細やかな優しさは、彼の変わらない部分だった。改札の前で立ち止まったとき彼が「送っていくよ」と言った。私は「大丈夫、ここから一駅だし」と断ったが彼が「でも」と食い下がるので「じゃあ改札まで」と譲歩した。その譲歩の中には、もう少しだけ彼と一緒にいたいという私の密かな願望が隠れていた。

「今日はありがとう」改札の前で私は言った。「なんかちゃんと話せてよかった」

「俺もだ。またこんなふうに飲めたらいいな」

彼のその言葉に私は曖昧に微笑むことしかできなかった。また会いたい。でも、それ以上に近づいてはいけないとも思う。私は彼に捨てられた女で彼は私を捨てた男だ。その事実は決して消えない。スイカをかざして改札を通り抜けながら、私は振り返りたくなるのを必死でこらえた。人混みの中に溶けていく私の背中を彼はまだ見ているのだろうか。それとももう、違う方向に歩き出したのだろうか。どちらでもいいと思ったが本当は、まだ見ていてほしいと願っている自分がどこかにいた。

それから二週間ほど、私たちは定期的に仕事で顔を合わせた。打ち合わせの場ではあくまでビジネスライクに徹し私は数字とデー

夕を盾にして彼に容赦なく修正を要求した。彼もそれに真摯に応え、営業としての役割をきちんと果たしていた。仕事の時間だけはお互いに過去を封印してプロフェッショナルとして振る舞うことができた。でも、打ち合わせが終わったあとの何気ない会話やエレベーターで二人きりになったときの微妙な沈黙の中に私たちは少しずつ、封印を解くための鍵を忍び込ませていった。

忘年会シーズンも終わりに近づいた十二月二十三日、会社の合同忘年会が品川のホテルで開かれた。私は黒のワンピースに控えめなアクセサリという出で立ちで会場に臨んだ。こういう大きな宴会は正直言って得意ではない。人混みの中で愛想笑いを振りまきながら名刺交換をするという行為がどうしても性に合わない。でも今日は、健吾が来る。そのことだけが私の心の支えだった。会場の隅で、彼が所在なさにグラスを片手に立っているのを見つけたとき私は思わず笑みがこぼれそうになった。彼もまたこういう場が苦手なのだ。その不器用さが、昔と変わらなくて、なんだかほっとした。

ビンゴ大会の喧騒に紛れて彼が私のところに近づいてきた。彼の「こういうの、好きじゃなかったよね昔から」という言葉に私は「相変わらずよく見てるね」と返した。本当に、彼は昔からそういうところがあった。私が言葉にしないことまでちゃんと見ていてくれる人だった。でもそれなのに私が一番見てほしかったものだけは、彼は最後まで見てくれなかったのだ。そう思うと胸の奥がまたちくり

と痛んだ。

そのとき、同僚の田所が背後から私の肩に手を置いて「日向さん、そろそろ次の準備を」と声をかけてきた。田所は仕事はできるが距離感が近くて正直少し鬱陶しい。私は彼に「ごめん、ちょっと業務連絡」と言って健吾から離れたがそのとき健吾が見せた一瞬の表情を私は見逃さなかった。彼はほんのわずかに眉をひそめ、視線を田所の手に向けた。あれは嫉妬だろうか。そうだとしたら、私はその事実になんて優越感を覚えてしまった。あなたにもそういう感情がまだ残っているんだと思うと、私の中の意地悪な部分がむくむくと頭をもたげるのを感じた。

お開きのあと、私は同僚たちと別れて一人でロビーに向かった。するとソファに座ってスマホをいじっている健吾の姿が目に入った。待っていてくれたのだろうか。そう思うと心臓がまた少しだけ早くなった。私は彼に近づき「木崎くん、帰らないの」と声をかけた。彼は顔を上げて「今、タクシー呼ぼうかと思ってた」と言ったがそれが嘘であることはすぐにわかった。彼は私を待っていたのだ。「よかったら、少しでも外の空気吸わない。ちょっと飲みすぎてぼーっとする」

私がそう言うと、彼は何も言わずに立ち上がった。二人でホテルを出て、運河沿いの遊歩道を歩く。クリスマス前の夜景はきらびやかで、あちこちにカップルが手をつないで歩いている。その中をか

つて恋人だった二人がただ並んで歩いているのは、なんだか不思議な感覚だった。

「さっきの人、同じチームの人」私は自分から切り出した。「優秀なんだけどちょっと距離感が近くて、正直たまに鬱陶しい」

健吾が何も聞かないうちから、私はそう説明していた。なぜか彼に誤解されたくなかったのだ。彼は「そうなんだ」と素っ気なく返したが、その声のトーンにはかすかな安堵が混じっているように感じられた。

「木崎くん、もしかして気にしてた？」

私がそう聞くと、彼は少しだけ言いよどんでから「気にしてない、と言ったら嘘になるかな」と言った。その正直さが妙に嬉しかった。昔の彼は、自分の感情を素直に認めるのが苦手な人だった。それが今こうして「気にしている」と言えるようになったのは、彼なりの変化なのだろう。

私たちはしばらく無言で歩いたあと、運河の手すりに手を置いて立ち止まった。水面を渡る風が冷たくて私は無意識にコートの襟を立てた。健吾は手すりに両肘をついて、遠くのレインボブリッジの灯りを眺めている。その横顔を見つめながら、私は思った。私はやっぱりこの人のことが好きだったのだと。そしてもしかしたら、今もまだ好きなのかもしれないと。その感情を認めた瞬間、私は急に怖くなった。また同じように傷つくかもしれない。また捨てられるかもしれない。でもそれでも彼と向き合いたいと思っている自分

がここにいる。その矛盾が、私の心をぎゅうぎゅうと締めつけた。

「私もね」私はぽつりと話し始めた。「あの別れ方ですごく自分を責めた時期があったんだ。私をもっと何かできたんじゃないかって。もっと自分の気持ちをちゃんと言葉にしていれば、って」

健吾は何も言わずにただ私の横顔を見つめているのがわかった。「でも最近、そうじゃないんだなって思えるようになった。あのときの木崎くんは、たぶん誰と付き合っても同じように別れてたんだろうなって」

それは私が三年かけてたどり着いた結論だった。彼を許すための理屈ではなく、自分自身を解放するための真実だった。彼はうなずいて「そうだと思う。本当にそうだ。だから沙耶は何も悪くない」と言った。その言葉を聞いて、私はやっとな夜の自分を完全に許せるような気がした。

「無駄じゃなかったよ」私は声を震わせながら言った。「あの時間は、私にとっては無駄じゃなかった。確かにすごく傷ついたししばらく立ち直れなかったけど、でもあの経験があったから私は自分を変えようと思った。もっと強くなろうと思った。誰かに頼るだけじゃなくて自分の足で立てる人間になりたいって。それに気づかせてくれたのは木崎くんだよ」

彼は言葉を失ったようにただじっと私を見つめていた。その顔は、三年前のファミレスで見せた申し訳なさそうな表情とは少し違って、何かが吹っ切れたような穏やかさがあつた。